

## キタキツネのキキ

12

作 なかむら よしひろ

しばらくしてまた車の音がしました。さっきのトラックには自分が見えなかつたんだ、キキはそう思って目立つように道の真ん中へ歩いていきました。もうおなががすぎすぎて、二二がそうしてひかれたことも忘れていたのです。その歩く姿はとてもまだいさいにならない若いキツネにはみえませんでした。やせ細って、まるでよぼよぼのおじいさんキツネみたいでした。そのときに来た車は軽トラックで、キキを見つげ止まってくれました。キキはなにかもらえらると思つて運転席の窓を見上げました。すると窓から怖い顔をしたおじさんが顔を出し、「こらっそんなところに出てきちゃ危ないじゃないか、シッ」と大きな声で言い、そしてトラックを急発進させていってしまいました。キキはとぼとぼと道端に戻りました。キキはもう立ち上がる元気もあり

ませんでした。うずくまつたキキの体につしかな降り始めた雪がつもつていきます。

「お母さん、おなががへつたよう、なにか食べさせて」何度もなんどもキキは頭の中で思いました。そしてつかれはてねむくなつてきました。するとどうしたことでしょう、まわりはもうすっかり暗くなっているはずなのに、目の前がろうそくをつけたような黄色い光でぼつと明るくなつてきたのです。

「あれっ、どうしたのだろう」キキはその光にさそわれるようにゆっくり起き上がり光に向かって歩き始めました。何かいいにおいがします。ぼつとした光の中にあつたのはキキの大好物のドーナツの山でした。ドーナツだけではありません。その横にはチョコレートもあります。とりの唐揚げもあります。これは駐車場にすてあつた人間の弁当の残り物を食べて大好きになりました。キキはうれしくなつてドーナツに飛びつきました。でもそのしゅんかんドーナツは消えてしまいました。その代わり、そこにはなつかしいなかしいお母さんが立っていました。「だめよ、キキ!」

「キキ、あれほど人間の食べものを食べてはだめだつて言ったでしょう。」

「だつてもうおなががべこべこなんだもん」

「それじゃ、こつちへいらっしやいお乳をあげるから」お母さんはそう言つて横になりました。そこはいつの間にかキキや二二が生まれ育つたあんなつかしい側溝のおうちでした。床は暖かな乾いた土で、さっきまで冷たい道路に座つていて凍りつきそうになつていた足がほかほかとあたたかいです。キキは「ぼくはもうお乳を飲むような子どもじゃないんだけどな」と思つたのですが、とてもおなががすいていたのでお母さんのおっぱいに鼻をよせました。すると、そこには二二がいてチュウチュウとおいしそうにお乳を飲んでいました。キキもお母さんのおっぱいとびつき、いきおいよく吸い始めました。口の中いっぱい甘い香りが広がりました。その時のお母さんのお乳はこれまで人間がくれたどんな食べ物よりもおいしくて、キキは夢中になつて飲みました。「お母さんのお乳はこんなにおいしいのに、どうして人間の食べ物なんか食べていたんだらう」キキはおながが一杯になるまで飲みました。そしておながが一杯になる

とねむくなりました。二二はもうねむつています。キキも二二の横に体を寄せ、すやすやとねむりはじめました。

キキの体に雪が降りつもつていきます。キキはふかふかの雪の毛皮でおおわれました。さらに雪は降り続きます。キキは雪像のキツネのようになりました。どんどん雪がつもります。もうキツネかなんだかわからなくなり、ついにはちいさな雪のかたまりにしか見えなくなつてしまいました。

よくあさは一晩ふりつづいた雪もやみ、まばゆいほどの天気になりました。その日は日曜日で、雪景色を見に来た観光客の車が何台もとおりました。子どもをたくさん乗せたワゴン車もとおりました。でも、だれ一人キキがうもれた雪の山に気づくこともなく通り過ぎていきました。



(おわり)